



70年分のありがとうをこめて!!

豪華2本立て!

～作家インタビュー 拡大スペシャル～

読書の葉

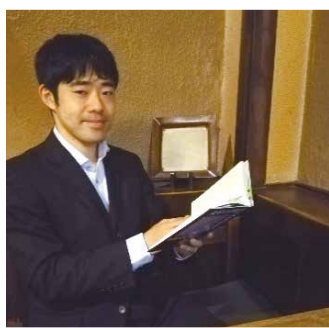
No.153

田園調布学園
中等部・高等部
図書委員会

Who are the
interviewees?

「読書の葉」は、昭和二十八年の第一号の発行から七十年を迎えました。そこで、今回は七十年を記念して名物企画ともいえる作家インタビューを「超」大ボリュームでお届け! なんと、二人の作家さんに書面でのインタビューが実現しました。編集員たちが出版社や事務所と直接連絡を取り、強い熱意をもって記事の形にするところまで作り上げました。

七十年分の想いがつまったスペシャル企画、ぜひお楽しみください!



向井湘吾さん

一九八九年生まれ。出版社勤務を経て『お任せ! 数学屋さん』で第二回ポプラ社小説新人賞を受賞してデビュー。日本数学オリンピックへの出場経験から、数学の知識をいかした児童書などを多く出版している。

詳細は4～5ページへGO!



宮部みゆきさん

一九六〇年生まれ。東京都出身。法律事務所などに勤務の後、八七年『我が隣人の犯罪』でオール讀物推理小説新人賞を受賞してデビュー。ミステリーをはじめとした幅広いジャンルの作品で知られる。

詳細は2～3ページへGO!

目次

作家インタビュー拡大スペシャル	P 1～5
もしも先生が作家になったら……?	P 6～10
オススメ本診断チャート	P 11～12

キニナルQ&A 宮部みゆきさん



作家になったきっかけなどがあれば教えて下さい。



子供のころからミステリーが好きで、ずっと読み続けているうちに書きたくまりました。いざ書いてみると、「この犯人は意外だった」など、と読んだ感想を聞かせてもらいたくなり、同人誌や文芸部などのあてがなかったので、小説教室に通いました。そこにはプロを目指す創作キャリアの長い人たちが大勢いて、そんな皆さんと小説を書き、ノリで新人賞に応募して、三次候補まで残った、最終候補までいけそうだし！などと楽しんでるうちに、瓢箪から駒で受賞することができて、作家のタマゴになりました。

とはいえ、もらったのは短編の新人賞でしたし、会社勤めは続け

ていました。単行本が出て専業作家になるまでは二足の草鞋で、いつも睡眠不足気味ではありましたが、振り返れば楽しい思い出です。



作家になって大変な時、やりがいを感じる時はどんなときでしょうか。



読者の方々から新作の感想を聞かせていただくのと、この仕事をしていてよかったと、しみじみ噛みしめます。今は好きな仕事ばかりしているので、大変だと辛く思うことはほとんどありません。ただ、還暦を過ぎてパワーが落ちてきたので、歳相応の仕事量と仕事の内容のバランスをとる必要が出てきました。



物語の構成はどのように考えているのですか？



思いついたことをずつと頭の隅に置いておいて、ときどき取り出しては考えていると、あるときフツと構成が出来上がるという感じです。

駄目なものは、どれほど長い間うんうん唸つてもダメですね。



ミステリー小説では、展開や結末などを全て決めてから書いているのですか？



結末は決めています。が、そこに到達するまでの展開は、要所要所のポイントしか決めていません。長距離バスのルートはだいたい決まっているけれど、バス停の場所と数は決まっていないう感じがします。



宮部さんが中高生の頃読んでいた本や、影響を受けた本などがあれば教えてください。



つい最近NHKでドキュメントとドラマになり、ドラマでは大沢たかおさんが作者の松本清張を演じた『小説帝銀事件』と、佐藤愛子さんのエッセイ『女の学校』。翻訳家の

永井淳さんと深町眞理子さんが訳されたたくさんの翻訳ミステリー。岡本綺堂の短編小説。全てから影響を受けました。



これから大人になっていく中高生へなにかメッセージを頂けると幸いです。



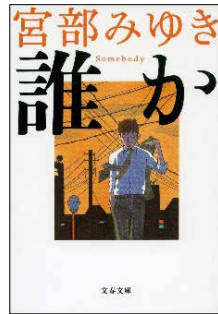
皆さんが人生の今の時点で出会う本は、長い人生をずっと伴走してくれる親友になります。たくさん友達と出会うのもよし、少数の友達と深く付き合うのもまたよし。どうぞ、本との交流を楽しんでください。

委員が全力で

推したい！

宮部みゆきさんの本

『誰か somebody』

文春文庫
(2007)

主人公の杉村三郎は、妻である菜穂子と結婚する条件として、義父である今多コンツェルンの広報室に勤めることになる。

ある日、義父の運転手であった梶田信夫が自転車に撥ねられて死亡してしまふ。

葬儀が終わってしばらく経った後、梶田の娘たちから「父親についての本を書き、犯人を見つけたい」と要望を受ける。一見普通に見えた梶田の人生だが追っていくうちにさまざまな真実が明らかになっていく。

この物語は大きな波があるというわけではなく、淡々と進んでいくのですが、ページをめくる手が止まらなくなる魅力があります。

前半に謎が深まっていき、中盤に様々な事実が発覚。最後には登場人物たちの過去が明らかになり、驚愕すること間違いなし。(普)

『名もなき毒』

文春文庫
(2011)

前述の『誰か somebody』から約一年後を描いた杉村三郎シリーズ第二作。

主人公である杉村三郎が勤めている今多コンツェルンの広報室に雇われた原田いずみはトラブルメーカーであった。解雇された原田は杉村のことを根に持ち、彼を

付け回していた。

一方その頃、街では無差別と思われる連続毒殺事件が人々の注目を集めていた。この二つの出来事が衝撃的なラストを織りなす物語。

人々が持つ善の心と悪の心を深掘りしている作品です。

さまざまな事件や出来事が起きているものの、「毒」が物語の軸となって進んでいく面白さもあり、かつ切なさもあり、大いに深さのある物語です。(普)



『希望荘』

宮部みゆき

文春文庫
(2018)

『誰か somebody』『名もなき毒』に続く杉村三郎シリーズの四作目。

主人公の杉村三郎は、妻と離婚し、家族と別れて暮らすことになる。仕事も失った彼は、私立探偵事務所を開設する。

そんな杉村三郎の新たな人生を描いた短編小説が四編収められた短編小説集。

短編とはいえ、どの話も一筋縄ではいかない複雑な話で、とても読み応えがある作品です。登場人物たちの犯した罪はとうてい許されるものではないのですが、彼らの動機や経緯を知ると、胸が苦しくなります。(普)

キニナルQ&A 向井湘吾さん



作家を志したきっかけがあれば教えてください。



小学生の頃に読んだ江戸川乱歩の『少年探偵団』シリーズがとても面白

く、図書館に並んでいたものをすべて読み、「自分もこういうワクワクするような小説を書いてみたい」と思ったのがきっかけです。



中高生のときに読んでいた本、影響を受けた本などはありますか？



中学生のときに芥川龍之介の作品を読み、影響を受けました。特に『鼻』が強く印象に残っています。『鼻』は人より鼻が長くて困っている主人公が、どうにか鼻を短くできないか奮闘するというよく分からない話なのですが、そのよく分から

い話なのですが、そのよく分からない話がとても面白く、「物語というのはこんなにも自由でいいんだ、よく分からなくてもいいんだ」と思っていて影響を受けたと記憶しています。



小説の中でも特に児童文学を書くことを選んだ理由があるのですか？



前述したように『少年探偵団』シリーズの影響が強かったためです。私にとつての原点が児童文学だったので、その方向に進みたいと考えようになりました。



物語を書いているときに苦労すること、やりがいのあることはありますか？



登場人物同士の関係性が見えてくるまでが、もつとも苦労の多いポイントであり、またやりがいのあるところでもあります。たとえばAさんとBさんは会話

するときには敬語を使うのか使わないのか、冗談を言い合える仲なのか、などが分からないことには、2人の会話が書けません。それを登場人物全員について考えるため、時間がかかります。

逆に、登場人物たちの関係性が分かかってしまえば、お話はスムーズに動き出します。問題にぶち当たったとき、彼らがどう行動するのか、どんな会話をするのかを考えやすくなるためです。



作中に登場する算数・数学の知識やトリックは、どのようにして考えているのですか？



知識は本で勉強します。トリックは散歩しながら考えます。



お話は最後まで結末を決めてから書くのですか？



結末は、ある程度決めてから書きはじめます。しかし登場人物たちの行

動によって、想定していた結末から変わっていくこともよくあります。



最後に、これから大人になつていく中高生たちにメッセージをお願いします。



大人になると、できることが増えていきます。そして世の中には面白い

ことがたくさん転がっています。私も一人の創作者として、世の中の面白いことをどんどん増やしていきたいと思っています。

しかし、世界に情報が溢れ、選択肢が溢れ、時には道に迷うこともあると思います。それは自然なことだと知っていてほしい、迷うのは悪いことではないのだと知っていてほしい——それが、私から伝えたいことです。みなさんの読書ライフが、そして人生が、充実したものになることを願っています。

向井湘吾さんの本

『お任せ！ 数学屋さん』

ポプラ社
(2015)

遙のクラスに、不思議な転校生がやってきた。「将来の夢は数学で世界を救うこと」だと宣言した彼の名前は宙（そら）。二人はひよんなことから、数学でお悩みを解決する「数学屋」を始めることになるのだが……。

日常の困りごとから恋の相談まで、何でもお任せあれ。遙と宙は、一体どんな答えを導き出すのか？

授業で触れる数学の「なんだこれ！」「分からない！」というイメージが一八〇度変わりま

す。難しい公式や定理だって、宙の手にかかれば不思議と納得できてしまうはず。

「数学なんて、将来何に使うの？」一度でもそう思ったことがあるあなたに読んでほしい一冊！ (田)

『トリプル・ゼロの算数事件簿』

ポプラ社
(2015)

主人公の有明雄天は、いつも居眠りばかり。そんな雄天の特技は「算数」なのだった。クラスメイトの恭平、怜と三人で「いじめゼロ、泣く子ゼロ、悪さゼロ」を目指す組織「トリプル・ゼロ」を結成する。ところが、そこに立ちはだかる影が……。

もしかするとこのお話、明日のテストに出るかもしれませんよ？

『算数』だから小学生向き？」

と侮ることなかれ、何歳でも楽しめます。受験生の方にもオスメのシリーズです。

主人公たちがそれぞれの個性を生かしてトラブルに立ち向かう姿が熱い！ 前述の『お任せ！ 数学屋さん』とあわせて読めば面白さが倍増すること間違いなし。ぜひ一読ください。(田)

『われら滅亡地球学クラブ』

幻冬舎
(2021)

あと一〇〇日で、地球は滅亡してしまおう!? 先生も失踪し、学校は自習ばかり。そんな中、主人公の玉華は「滅亡地球学クラブ」を立ち上げた。玉華のお目付け役である碧、マイペースな利那と三人でスタートした部活動。新入生の正義も加わり、四人で目指す「今

しかできないこと」って……？
生き方を探すために、あるいは、死に方を探すために。僕らの最後の青春が幕を開ける――。

私はこの小説を、新型コロナウイルスの影響で様々な活動が制限されてきた数年間のことに思いをはせながら読みました。

地球がもうすぐ滅亡してしまうかもしれないという状況下であえて日常を生きる玉華たちの姿に心震えます！ (田)